

JAPANESE CULTURAL CENTER OF HAWAI‘I

ORAL HISTORY INTERVIEW

with

Shozo Takahashi (ST)

and an unidentified woman who is presumably his wife Yuriko (YT)

March 12, 2004

Interview by: Ted Tsukiyama (TT)

and

Jim Tanabe (JT)

註：[ ]内の表記は、転写者による英語の言葉の和訳または補足。((?)) は聞き取り不能又は不明瞭の言葉。太字の英語（例 **family**）は会話が実際に英語でおこなわれたことを表し、読みやすさのために、内容に差しさわりの無い程度に編集されている。日本語も同様に読みやすさを考慮し編集されている。

**TT: Today is Friday, March 12, 2004, and this morning, we are interviewing Mr. Shozo Takahashi, who has a very special and valuable life story to share with us. The interview will be conducted in Japanese although English may be used to clarify any part of the interview. The interviewer is Ted Tsukiyama, assisted by Jim Tanabe. So let's begin.** [本日は2004年3月12日です。これから高橋正三先生へのインタビューを行います。先生は人生において数知れぬ貴重な経験をされており、今日はそれを語っていただきます。インタビューは基本的には日本語で行いますが、より明確な説明が必要な場合は英語も加わります。聞き手はテッドツキヤマとジムタナベです。] 高橋先生おはようございます。

**ST:** おはようございます。

**TT:** ではね、最初からお名前をおっしゃってください。

**ST:** はい、私の名前ですね。しょうぞうね。正三高橋。1914、大正3年に **Ewa** [オアフ島西側の地区] に生まれて、大正の正と三年の三を取って、正三という名前をつけたと聞きました。私のクラスにね、日本でね、私のクラスに3人、同じく正三という子がおりまして、大正3年生まれで、読み方がみんな違ったんです。私が「しょうぞう」、もう一人の人が「まさみ」、あれは「まさ」とも読むでしょう、三は「み」とも言いますから。もう一人はカンノ正三といひまして。もう一人はね、「まさぞう」、上は「まさ」で、下が「み」。みんな読み方が違いましたが、大正3年で、あの土地に生まれたのね。3人正三。こんなこと書いてありません。1914、**July** [7月] 29。7月の29日に **Ewa** の **sugar plantation camp** [サトウキビ畑内のキャンプ] で生まれたんです。

TT: それで、先生は2世ですね。

ST: そう、だから私は2世。私たちは帰米二世と言います。ハワイで生まれて、日本で教育を受けて、またハワイに帰ってたのは、「帰米」と言いますね。帰米二世は一応日本の戦争中は苦勞しました。

TT: あの、先生のお父さん、お母さんの名前は何かですか？

ST: お父さんは、高橋リクスケ、お母さんは遠藤なんです。遠藤ハツだったんです。だから遠藤のうちに母は生まれて、ハワイに来て、高橋リクスケと結婚して、だから高橋となったわけですね。だから、日本に帰ったのはお母さんのほうに帰ったんです。高橋じゃないんです。遠藤のほうに帰りました。

TT: 両親の地元、出身はどちらからですか？

ST: うちの父も母もどちらも福島県なんです。福島県でも北のほうね、ずっと一番北のほうの、宮城県との境のほうの、伊達郡という郡の一番北のほうの。その伊達郡で、同じ郡だったんですが、村は違いまして、うちの父親のほうは大井田村からもってきたので、母親は東の村って同じ郡でした、福島県郡ね。

TT: お父さんはどういうわけでハワイに移民したんですか？

ST: うちの父ですか？お父さんはね、そのころ、私はっきりしないんですけども、日本から、**sugar plantation** [サトウキビ畑] に仕事があるから、**pay** [給料] もいいから、日本で **sugar plantation** で働く人を求めたときに、まだ若かったからね、うちのお父さんは3番目、三男で、高橋家の。だからどこ行くのにも自由ですから、ハワイに来たわけですね。でもお母さんのほうは、なぜハワイに来たかというね、うちの遠藤旧父という、お母さんのお父さんですね、その旧父が何か、失敗してから、自分のうちの財産がなくなったんですね。で、困ってから、ハワイにどうしても行って、働いて、自分のうちをまた元のようにしないといけないってんで、ハワイに遠藤のおじいさんがハワイに来て、ハワイで働いて、そのお金を送って、遠藤のうちのね、また再興させるってよくいってました。それを聞いた私のお母さんはたぶん、**eighteen** [18歳] ぐらいだったと言いますがね、じゃあお父さん私も一緒に連れて行ってください、私はあなたに **help** [手伝う] して、早くあの、お金をためて、一緒にまた日本に帰って来ましょうって、お父さん[正三氏の祖父]を **help** するためにお母さんが来たんです。それまで、ちょっとお父さん[高橋リクスケ氏]を知らないわけで、高橋ですからね。そして、ハワイに来て、いまの **plantation** [農場] で働いてお母さんは、はじめね、**sugar cane**[サトウキビ] の畑で働いてね、そのうち自分のハウスのキッチンで **cook** [料理] 始めたの。で、また **young boy** やなにからいっぱいおったから、弁当を作ったりね、自分のうちで **cook** を始めたの。その中にうちのおとうさんがおったわけ。来て、食べる。お父さんまだ独身でしたから。そこでお父さん知って、同じ福島県ですから、ほんで、そこでお父さんと結婚したわけですね。それまでは知らなかったわけ。

TT: そして、あの、家族は、兄弟は何人でしたか？

ST: いや、私はね、たくさん家族がおるんですけど、兄弟多いんですけどもね、ハワイで生まれて日本で育ったのは、私の兄、リクオ、今まだあそこにおりますけど、[右手で外を指差し] 兄と、それから、私は姉がおりまして、ここに写真がありますが、今北海道におります。この姉だけが日本におるわけです。そして、私でしょ、三番目。そして、あとみんなハワイで生まれたんです。私の弟ね、5人くらい、あと、ハワイで生まれてます。みなハワイで生まれています。

TT: 先生は幼いときから日本に帰ったそうですね。

ST: そう。7月に生まれたの。July 29 ね。そして、11月ごろといいます、そうこれね、これが、1915のときの写真ね。私が生まれて100日目といいますから、**hundred days** [百カ日] ね、**three months** [三ヶ月] ぐらいのときに日本に帰ったんです。このおばさんも一緒に、これは私の **Auntie** [叔母] です[写真を指差し]、これは。お母さんじゃない、**Auntie** なんです。お母さんが腹から[原文ママ]、日本で子供を産むって、日本と一緒に帰ったわけです、おばさんとおじさんが、ハワイにおりましたからね、やっぱりね、働いて。で、ハワイから、一緒に帰ったんですよ、うちのおじさん。その途中で、船の中で、ベビーは生まれたんです。私の **cousin** [いとこ] ですね、この **cousin** の名前はヨウゾウ。太平洋の「洋」、**Pacific Ocean** [太平洋]、に三年だから、洋三。私は正三。このおばさんね、日本でこのベビーを育てる。私も乳をもらって、育てたんですね。洋三君は二つか三つになる前にハワイに戻ったんですね。私はずっと日本で教育を受けて。はい。

TT: そのうちは両親、お父さんとお母さんは、ハワイにいたんですね？

ST: ずっとハワイにおったんです、もう。

TT: そしたらもう、先生はおじいさんかおばあさんのうちで育てられてるんですね？

ST: おじいさんとおばあさんに育てられました。だから、私小さいときね、このおばあさんのこと、自分のお母さんと思って、あの、おっかやん、**local** [地元] の言葉でおっかやん、お母さんというんだけど、おっかやん、おっかやんって言って、お母さんといって、自分のお母さんだと思っと思ったわけですね、小さいころは。

TT: そしたら、日本の少年時代は、日本にほとんど。。。？

ST: そうですね、ほとんど少年、青年時代は、日本で私はね、小学校6年生、その次に高等小学校というものがあましてね昔ね、2年ね、高等小学校にね、これは自分がまだ小さいから、自分はまだ6年生ですから、高等小学校は次の村にありまして、そこに2年行って、そして、先生になるつもりで私、**normal school** [師範学校] に、福島師範学校に、テストを受けたらね、パスしたんですよ。だから、学校の先生になるために師範学校に **five year** [原文ママ五年間] 行きました。そして、卒業して、**twenty** [二十歳] のときに、5年でしたから、卒業して、そして **normal school** はね、師範学校は **tuition** [学費] がいらんんですよ。その代わりに、**have to teach** [教えなくてはならない]、四年間は自分の同じ県で、福島県ね、**four year** [原文ママ]はどうしてもしないといけない。だから私は **twenty** で **graduate** [卒業] して、**twenty four** [24歳] まで4年間、先生したわけで

すね。この子供達 [写真をさす] 教えたんです。私が 1934、初めて日本に行って、小学校 4 年生の子供達ね、教えたんですよ。あのごめんなさい、3 年生です。

**Third grade** [三年生]。3 年、4 年、5 年、6 年、**same class** [同じクラス] を **four year** [4 年間] 教えて、あの小学校 **graduation** [卒業式] [写真をさす]、それから私はハワイに来たわけですね。この子供達がね、私 1992 に **October** [10 月] に日本にいたときに、この子供達が私を **welcome party** [歓迎会] をしてくれたんです [別の写真をさす]。これだけ集まって、私のこと歓迎してくれたんですね。私と家内がおるのですが。この子供達ね。忘れられませんね。

TT: 日本で少年時代の話、どんな思い出がありますか？

ST: 少年、子供の時ですね、そうですね、子供のときは、田舎ですから、山に行ったり、川に行ったり。きれいな川がありましてね、その村のはずれの水面のほうの川に行って、魚を獲ったり、それから、夏はそこで泳いだりね、しまして。小学校はそこにずっと行きました、はい。小学校の時代の同級生もおりましたが、もう、日本に帰った当時ね、クラスメイトが集まって私たちを歓迎しまして、やはり同じ、自分の小学校時代の子供達が集まって、10 人もおらなかったね。6,7 人一緒に私を歓迎してくれました。

TT: おじいさんの仕事はなんでしたか？百姓さんでしたか？

ST: **Farmer** [百姓] でしたね、畑と田を持ってまして、田というのは、**rice field** [田畑] ね。畑というのは、主に桑畑、日本では東北地方で蚕かいこ といって、繭まゆ を作る蚕というのがありますが、それをあの育てて、繭まゆ を作って、それを売る仕事ですね。そのために蚕に食べさせる桑の木というのがありまして、桑の葉を食べさせるんです。その、畑と **rice field** がありましたね。その仕事をしてました。その繭まゆ からね、絹糸、シルクをつくわけですね。

TT: 日本に住んでた間、時々自分の親と会うことはありましたか？

ST: 誰ですか？

TT: **Ewa** に住んでる、お父さん、お母さんと一緒に会うことはありましたか？

ST: **No** [いいえ]、お父さんお母さんはハワイですから。私は日本ですから。会うことはなかったですね。ほとんど。私が 1938 ですか、ハワイに帰ってきて、初めてお父さん...お母さんはね、いっぺんハワイに、いや日本に来たことがありましたから、私が師範学校 2 年のときにおじいさんが亡くなったんですよ、私を連れて行ったこのおじいさんがね。それで、そのときにお母さんがハワイから日本に来ましたので、お母さんにそのときは会いました。それで、私が 24 のときにハワイにはじめてきて、ホノルルのあそこで、**Immigration Station** [移民局] で初めてお父さんに会いましたね。

TT: そしたら、先生の教育は全部日本の学校に通ったんですね？

ST: 私はね、小学校 6 年生、7 年、8 年、あと 5 年は師範学校だったから、**13 years**、13 年は日本で教育を受けますね。そして、ハワイに来てから、私英語がわかり

ませんから、Nu‘uanu Avenue [ホノルル中心部にある道路名] にね、中央学園という学校があって、あそこのね、ミス＝スエヒロが中央学園のルームを借りて、私たちのように日本から来た若い子供達に、英語を教えておったんです。スエヒロ英語学校とって。私もよく行ったんです。校長先生はスエヒロ先生という年取った先生が、4人の先生は、白人の先生でしたがね、1年生から、全然わかりませんから、ABCから習ったわけなんです。3年間行きました。そして、それがすんで、ちょうど小学校のだいたい済みましたから、**high school** [高等学校]に行こうかと思ったときに、戦争になったわけですね。私のハワイでの **education** [教育]は **only six grade** [六年生]したくらいになりましたね。High school 行かれないかったですね。

TT: 1938にねどういいうわけでハワイに帰ったんですか？

ST: 私は日本で先生しとった時に、ハワイで日本学校の先生をした方がね、私の近くにおりまして、帰ってきたんですって、**vacation** [休暇] で。その方はハワイのどこの日本語学校だったかは、**Palama** [ホノルル市内地名] かな、日本語学校の先生だったんです。女の方で。その人がね、うちのおじいさん、おばあさんを知っておって、会ってね、その人が言うのには、ハワイでは日本語がとても盛んで、どこに行っても日本語学校がある。ただ先生が少ない。特に先生の **certification** [資格] を持つてる先生ってのが少ないから、あなたハワイに行ったらどうですかって **suggest** [提案] しにきたんです。私もね、そのころはおじいさんは私の **normal school** のときに亡くなりました、おばあさんがおった訳です。で、私は自分を育ててくれたおばあさんを **watch** [見る] するつもりだったんですけど、ずっとね、おばあさんの **number one boy** [長男] がハワイにおった。そのおじいさんがやっぱハワイから帰ってきたんです、ジャパンに。私のお母さんはハワイにおるでしょ。うちのおじいさんの **friend** [友達] が、お前は、うちのおじいさんに、**number one boy** だから、日本に行って、お母さんを **watch** しなさいって言って。おじいさんはそれだから、母さんは私が見ますって言って、子供をつれて日本に帰ってきたわけです。救世軍、**Salvation Army** [救世軍] の仕事をしてたんです、うちのおじいさんは。日本に帰らなんつもりだったけど、そう言われて、初めてこんど日本に帰ってきたわけなんです。で、おばあさんを見ることになった。**Indoor house** [家の中] でおばあさんを見ることになったんです。私は高橋ですからね、**number one boy** がそのために来たから。ハワイに行きたいといっても、誰もいられない。ハワイで生まれた **birth certificate** [出生証明書] か何かなかったら来られないわけですね。私はハワイで生まれた **birth certificate** を持っていましたから、私はハワイに行って、ハワイの学校の先生して日本語教えようっていう。ほかの人ができないことだから。わたしはハワイに行って日本語学校の先生をしようと思って。私を育ててくれたおばあさんも、お前はお父さんもお母さんもハワイにおるから、ハワイに行ってもいい。ハワイに兄弟もおるから、ハワイに帰っていい、オーケーしてくれたの。だからわたしはハワイにくることができました。それからずっとハワイにおるわけです。

TT: ハワイに帰ったとき、またお父さんお母さんと一緒に住んでいたんですか？

ST: ここ、ここ、[カメラ外を指す]

TT: 自分独身で？

ST: **No, no, no.** お父さん、お母さんがね、22番ねここは、そのころ日本人の **farmer** [百姓] だった。あの野菜を作ったり、花を作ったり、豚を飼ったり、牛を飼ったり、この辺全部日本人の(?)だったの。うちの、これ2軒、3軒目のところ、うちの兄が居りますが、お父さんお母さんのハウスがあって、ここ全部ね、**Punahou Farm** [農場の名前] いて、**Punahou School** [ハワイ名門校] が持ってたんでしょね、それを **one section** [一区画] をリースしてたわけですから、ハウスがここに、小さなハウスで子供がだんだんこう[分けていくしぐさをする]、そこのね、**garage** [ガレージ] のところには **extension** [増築部分]、そこに私はおりました。そして、戦争後はこれも住宅地になりまして、**subdivide** [再分割] して売りましたから、うちの兄がここを買いましたね、**private road** [私道] 言うて **one lot** [一区画] はね私とうちの **brother** [兄か弟] **Mike** がね、いるんだったら、**first chance** [一番の権利] やるっていうて、マイクが **corner** [角] を私がこの土地をね、うちの兄からもらって、自分でハウスを建てました。私 **carpenter** [大工] してましたから、戦争中に。

TT: おお、この家は自分の手で作ったんですか？

ST: 自分でやったんです。**Weekday** [平日]、**weekend** [週末]ね。私の **wife** [妻] の **brother-in-law** [義理の兄弟]、ポールノリハラ、**construction** [建設業] だった。そこで、私はね、**internment** [収容所] から帰って、**Honolulu Planing Mill** [貯木場会社名] に戻ったんですが、何か手に仕事をやりたくて、**carpenter** だったら、言葉なんか知らなくても手でできるでしょう、それで **carpenter helper** [大工見習い] です。**More than four year** [四年以上] ね、**carpenter** をしながら、**weekend** に、この土地を **mortgage** [抵当] にして、お金を借りて、このハウスの **material** [材料] を買いました。**Carpenter** の **job** [仕事] はほとんど私と一緒に **carpenter** してた人が **help** [手伝い] してくれましたね。建てたんです、これを。**One year** [一年] かかったです。このペイントも私しました。だから、自分の建てた(笑う)。そして、自分の、屋根から落ちたんですよ、慣れてないからね。あのころの **carpenter** は **foundation** [土台] と **roof** [屋根] みんなやったからね。どっか **Kokohead** [ホノルル市内地区名] のほうで、何か大きなハウスを建てて、屋根を仕事してるうちに、ちょうど水をまいてて、滑っておちて、足を怪我してね、ここに大きなきず[足を指す]、仕事できなくなったんです。そしてから、また **one year** くらい仕事[首を横に振る]そのうちにまたね、日本語学校が始まりましてね、パラマ学園という学校が **Palama** にできまして、私戻りまして。そしてずっと学校の先生をやっていました。パラマ学園からスタートしましてね、**after the war** [戦後]、**Kaimuki** [ホノルル市内地区名] の日本学校に20年。戦争と戦後と(笑う)。

TT: 1938にハワイに帰って、すぐ先生の仕事をしたんですか？

ST: そう。あの時はね、すぐうちのね sister、younger sister [妹] Sara というのが今でもおりますが、これが、**Japanese Consulate**[領事館] 領事のうちの **house work** [家政婦] をしとったんですね。で、**my sister** の紹介で、総領事の **recommendation** [推薦] がありましてね、**Nu'uaniu** の中央学園って言うところの先生をしました。はじめ、あそこで日本語学校の先生をしたんです。午前中は英語学校行って、午後からは日本語教えたわけ。

TT: 中央学園でタサカさんとは会いましたか？

ST: (笑い) そうです、タサカさんと一緒だったんです。タサカさんはね、中央学園は下の学校と上の学校がある、下の学校、今の **highway** [ハイウェイ] のあたりにあって、小学校の6年生7年生くらいまで、そして8年生から高等科までは上の学校って言って、あの **Nu'uaniu** ずっと登ってね、葬儀所がああ辺にあったと思うんですよね、上の学校っていうのは。タサカ先生は上の学校、中学3年4年、高等科で **high**、上のクラスを。で、私は **one week** に **one time** [週に一度]、上の学校に行って高等科の生徒にね修身というものを教えてね、昔修身というのがありましたね。

TT: あっ、はい。

ST: (笑い) で、高等科の生徒に一週間にいっぺん修身を。そのときにジョージタカバヤシって言うのにですね、今でもいるでしょ。

TT: 知ってます。

ST: あれが **student** [学生] だったんですよ、高等科にいるね。今でもね、思い出すがね。一週間にいっぺんは女の子、高等一年の女の子に作文をさせた。曹洞宗のマチダっていう女性、マチダ先生の奥さんが、私から習ったんです、中央学園のね、こんな子供も教えたわけです。あとは、下の小学校の先生。だから私はだいたい下の小学校。タサカ君は上の学校、高等科の先生ね。

TT: 今でも、時々、タサカさんに会いますか？

ST: 時々、会いますよ。木曜午餐会、って **YMCA** にあるんですよ。私、あそこのメンバーで、絶対行くんですがね。あの、時々タサカさんが見えになって。で、あの方も木曜午餐会で話したことがありますね。いろんな人が話しますからね。あそこで会うことがあります。懐かしい。私と年同じですから。

TT: 木曜午餐会で僕の父と会いましたか？ セイノスケツキヤマ。

ST: あー、そうですか。ずっと昔ですね。私が木曜午餐会に行くようになったのは、

TT: 最近ですか？

ST: 先生済んでからだから、10年くらいですかね、あそこ行くようになってから、その前でしょうね。あの前は、あの方が長いこといました。カネタケという方がね。あの方がずっと何年、何十年といましたね。懐かしい。

TT: 先生の生徒で、シロ・アミオカって覚えてますか？

- ST: あっ、あーシロ・アミオカ君ね。覚えてます。ご存知です？
- TT: 同級生です。
- ST: あっ、同級生ですか？シロ・アミオカ。あー、日本語も英語もよくできて、ハワ大学の仕事をしてる、そうそう。
- TT: そして、フジオ・マツダも？
- ST: (笑い) ええ、懐かしい。**Kaka'ako** [ホノルル市内地区名] かなんか。
- TT: ええ。はい。そうしたら、戦争が始まるまで、中央学園で先生の仕事をしていたんですね。
- ST: No。中央学園には一年だけおったんです。私が **1928** につきまして、**nine** までね [1929の意]。ところがね、私ここでしょ？この近くにワイアラエ日本語学校というのがあったんです。あのミヤギ先生って言う先生が校長先生でね。この辺が日本人が多かったですからね。**Waiialae** [ワイアラエ日本語学校] のほうにね、こう近いから、来てくれって言うのでね、私はワイアラエ日本語学校に変わったんです。そして、**1994** いや…戦争が始まるまでここにおったんです。で、戦争が始まって **1941** に始まったときに、丁度私は、ミヤギ先生のオフィスに行きまして、戦争始まったからどうするかと思って、心配で行った。話している内に、**FBI** が来まして、ミヤギ先生を連れて行きました。**intern** [収容] されたのね。
- TT: それは戦争前ですか？
- ST: 違う違う、戦争始まった日に。
- TT: ああ、そうですか。戦争前の話ですけど、ワイアラエの日本語学校で先生として、そしてここに住んでいたんですね。
- ST: そうそうそう。**22nd Avenue** [22番街] に近いからね、ここから通っていました。ワイアラエ日本語学校ね。
- TT: そのワイアラエ日本語学校の校長先生はミヤギさん。
- ST: ミヤギ先生ね、ミヤギ・ゲンエイ。奥さんも一緒にしてました。
- TT: それではね、真珠湾攻撃の日ね、**December 7<sup>th</sup>, 1941**[12月7日] を覚えてますか。
- ST: いやー覚えてます。その日のことで？
- TT: ええ、ええ。その日のことで、覚えている…
- ST: はい、これ、この中に書いてないんですけど、日本人の、なんですか、**Japanese Society** [日本人協会] がありますが、その頃ですよ、**1940** から **41** にかけてね、ハワイがね、もし戦争になったらね、**first aid** [応急手当] いろんな **help** せんといかんでしょ？あちこちにドクターが居て、どんな風にして **help** したらいいかっていう、そういうプログラムがあったんです。で、**Waiialae** にもね、ドクターヤマシロかね、**one week** に **one time** [週に一度] 居ましてね。私もそこに出ました。そして済んだら **certificate** [終了証] 渡す。戦争中にもし何かあったときにヘルプ

するその **certificate**。それからね、昔の東洋劇場ってのがありました。あそこでね、日本人の商工会の日本人の人たちが集まって、ハワイの全島から講習を受けた人たちが集まってね、その **certificate** を渡すとき、それが **December 7** だった。途中でね、**army** [陸軍] の **officer** [士官] がステージに上がってね、「日本が **Pearl Harbor attack** [攻撃] した。戦争始まった。お前たちは真っ直ぐすぐ家に帰れ。」そして、私は、本当にもうびっくりして、戦争になってびっくりしてね。で、私と校長先生が一緒に行っておったわけですね、その講習受けましたから、二人で。で、丁度済んだから、ミヤギ先生と一緒に帰ったんです。そして、オフィスでね、これからどうなる言っているいろいろ先生と話して。困ったことになった。そして、まもなくね、**FBI** が来たんですよ。そして、校長先生を連れて行ったんです。その時に校長先生がね、スリッパはいててね、「いや、自分は着物を着替えて、スリッパじゃなくて **shoes** [靴] を履いてくるから、ちょっとタイムくれ」と言ったんですがね、**FBI** の人がね、「**No, no, not necessary**、せんでもいい」と。着の身着のまま、スリッパのまま連れて行かれた。あれが **December 7th** だった。あーびっくりしました。いや、あの **December 7th** にね、主なるリストがあったんですね。**Japanese leader** [日本人の指導者] ね。で、学校の校長先生、なにかあの **Japanese** の **club leader** [会合の先導者] のような人がね、商工会の会長とかね。そういう人から先に **Sand Island** に。これは **detention camp** [拘留所]。ここに皆始めは連れてかれたんです。そして、これがもう狭くなって、**Honouliuli**、私が入ったの、この **Honouli** [Honouliuli ホノウリウリの意] 収容所。**Honouliuli** の山の中に、これは **internment camp** 「収容所」ね。こっちは **detention** [拘留]。ここに私は、ずっと後からですが、そこに入りました。そこに書いてあります。

- TT: あの、**December 7th** の朝ね、日本がパールハーバーを攻撃したって言うニュースを聞いた、その時の気持ちか感じはどう思いましたか。
- ST: そうですね、来るものが来たという風に考えて。無い様に願っておったんだけど、やっぱり、どうしても仕方が無かったんだろうと。でも、困ったなと思いましたがね。これからどうなるかとも。それが心配でした。ハワイはね、**friend** とかはどうなるかと思って。あれが心配でした。あれが一番。
- TT: その時に日本にいた人たちは、どういうね。
- ST: 気持ちですか。そうですね、日本はどうしてここまで来て、真珠湾を攻撃しなければならなかったかと、本当にあの、ひとつは苦しい幕はあったね。どうしてそういうことしたかと。でも日本に私長いこと居りましたから、日本の事情も良くわかるわけです。どうしてもね、満州とかねあっちにこっちにこう手を出してましたから。いつかはそういうことが来るかと思って心配しておりましたがね。やっぱり。日本は小さいのにそこに人がいっぱいおる。あの頃ね日本は自分たちは神の国だという風に考えておって、もう絶対に負けないんだという風に考えて居ったんです。日本人たちはね。私はあまりそう深くは思わなかったけど、日本はあの頃は、なんていいますか、**Germany** [ドイツ] のね考えと同じような考えで、本当。強い考えを持っておったから、戦争に勝つあれはあったかどうかわからんが、ともかく、真珠湾を押さえて、そしてその内に、アジアの方をコン

トロールするという考えがあったんだと思うんですね。いや、困ったなと思いました。実際どうなるかと。

TT: 困った気持ちが、湧き上がったんですね。それまでは、一生日本で育てられて、教育ももらって。で、アメリカに帰ってからわずか2,3年だったんですね。

ST: だからハワイに帰ってきたのが **38** [1938年の意] ですから。 **39、40、41、only three years** [3年だけ]。ね、だから、まだはっきりしたことはわからなかったんですがね。自分の英語も十分でなかったしね。 **Japanese** の **idea** [考え方] が強かったわけですよ、やっぱりね。だから **intern** されたわけですけど。

TT: やはり、日本人としての気持ちが強かったんでしょ？

ST: そうですね。自分は、ここにも書いてありますが、日本で **twenty four years** [24年間] もね、ずーっとそうやって日本の教育を受けてるでしょ。どうしても頭は、日本的の考えがある。これ、仕方が無いですよ。だけれども、私はね、ホノルルで船から上がるときにね、 **Immigration Station** に上がる時には、アメリカのハワイに生まれたって言う **birth certificate** 持って、自分はここで生まれたからって、アメリカ市民だって言って上陸した。自分はだから、 **Selective Service** [選抜徴兵] の時も言ってますが、ハワイに来たときにはアメリカ人という風に自分がその自分の権利を向こうが認めてくれて、私が上陸することができたんだから。自分のそういう権利を認めてくれた以上は、私が日本で受けた教育っていうのは、自分の権利だけ主張してね、自分でしなければならない義務という **duty** [義務] というのがあります。それをしないのが一番これは、人間として一番つまらないってね。だからもし、天命を与えられたら、自分の **duty** 義務はしなければならないって私の日本で受けた教育なんです。だからもし、私がアメリカの兵隊に **induct** されたら、どこまでも自分はアメリカ人って知って、最後まで私自分のベストを尽くして、自分のライフをあげても、アメリカのために私は尽くしますと、 **I do** [誓う] と。私は **Selective Service** の **examination** [検査] のときに青木さんにそう言ったんですよ、私は。だからもし、私が **induct** されて、 **maybe** [もしも] 百大隊 [第百歩兵大隊]、 **100 Infantry Battalion** とかあるいは、通訳兵ね、 **interpreter**、私と **friend** になったら、 **I do my best** [ベストを尽くす]。どんなことでも私はアメリカの、自分の **duty** のためにすると。それが私が日本で受けた **education** [教育]。権利を認められた以上、自分の義務というものがある。 **Duty** って言うものは、しなければならないって言うのが、これは人間として大事なことっていうんだからそういう考え方が **maybe** [もしかしたら]、 **pro-Japanese** [親日] だったんでしょね。 **Maybe**。だからすぐ私は、2,3日経ってから **internment** 収容所] に送られたんですね。私の **idea** [考え] はそれだった。自分は、アメリカ人として認められて、ハワイに上陸したんだから、それ以上は自分の **duty** は十分はたさなきゃいけないっていうのは私の考えだったね。だから、私はその考え方、どこまでも正しいと思ってね。たとえ **intern** されても、私はその考えは持ってましたね。

TT: やはり、義務は修身の一番重大の価値観ですね。

- ST: はい。
- TT: 義務って言う。
- ST: ほんで、修身を(笑い)。
- TT: 教えたんでしょ？
- ST: 中央学園で修身を教えた(笑い)。
- TT: 我ら二世みんな、戦争前には毎日一時間ほどは日本語学校に通わされました。
- ST: そう誰でもみな行くからね。
- TT: そして、修身を習って。
- ST: 修身を習ったでしょ、あんたも(笑い)。 だから百大隊 [第百歩兵大隊]のね、あれは **442** [第 442 連隊]とか、ああいう **volunteer** [志願]して、アメリカのために最後まで尽くした。あれはやっぱり、日本から習ってるからだったと思うね。**Yea, yea, yea**—あれは、だから、((?))プレジデントは **apologize** [謝罪]をした、私たちにそういう **discrimination** [差別] ですか？それに対して、すまなかったと言ってね、最後にね大統領が **apologize** [謝罪] してから。私はいつもここに掛けてありますが、大統領が**\$20,000** の **check** [小切手] **Congress** [アメリカ議会] が OK してくれたわけですね。(笑い)
- TT: では、あのパールハーバーの攻撃と一緒に、突然に日本語学校の先生の仕事はもう
- ST: 全部なくなっただけですね。日本語学校は **all closed** [すべて閉鎖] だったね。
- TT: そして、先生はどういう仕事をしたんですか？先生の仕事はもうなくなっただけから。
- ST: **Honolulu Planing Mill** という **lumber yard** [貯牧場]があったんですよ、**Kaka'ako** にね。で、私のお母さんの方の、**relative** ね、親類の者がそこで仕事をしとったんですね。ミツカて言う。ジミー・ミツカかね。あれがその **foreman** [現場監督] かなんかしとって、その世話でね、私 **Honolulu Planing Mill** の仕事をしてました。で、大きな **lumber** [木材] を
- TT: 労働人として？
- ST: そう、労働者でね、もう。そこで英語使わなくても、手があればできたからね。ずっと。その後今度はインターメントキャンプから帰っても、また戻ったんですよ。テンポラリーリリースだったけど、そこに帰って。それから今度しばらくしてから、うちの家内の **brother-in-law** [義弟] が、ポール・モリハラが、コントラクターだったから、あのころあっちこっち沢山ハウスできたでしょ？で、私はカーペンターになった。手の仕事ですからね、そう英語わからなくてもできますから。カーペンターの仕事をやりました。
- TT: 戦争中はやはり、建築の仕事が

ST: そうそうそう。戦争中は **Honolulu Planing Mill**、そしてそこで **FBI** が来て。働いている所にね。 **Working hour** [仕事] に連れて行かれた。ディリングハムのビルディングに。 **FBI** に。そして、はい、そこで調べられて、その時は帰されたんですよね。

TT: いつでしたか？

ST: あれは、これに書いてあります、どこかにね。

TT: ええ、あの、1943 の 3 月。 **Selective Service** に、あの、のオフィスに行ったんでしょ？

ST: いや、1942。。。

YT: 1943 の 3 月だと。

ST: 1943 の。。。ここに書いてありますね、1943。私、それまでは。私は戦争になってね、なぜすぐ **Selective Service** のね、あれを受けなかったのかって、私はね、うちのお父さんがファーマーだったんでね。野菜作りしておったんだ。で、あの頃はあの、 **Selective Service** のね、 **classification** [区分] があって、ファーマーはね、 **(?) three... three B [3B]** か **three [3]** だったんですね。 **Selective Service** の始め、ファーマーの人は後にね、延ばされて。

TT: **Defer** [徴兵猶予] されて。

ST: **Yea, yea. Because** [なぜならば] 食べるもの作るんだからね。それでしばらくは、私だから、194—あれまでは、すぐ戦争後、直ぐあれが無かった。うちの **brother** [兄か弟] でもね、あの頃はもう兵隊に入っていましたからね。私も、カイクミに **Selective Service** のオフィスがあるっていうんで、「お前はファーマーの仕事してるから、しばらく延ばしてやる」って言うてしばらく伸びておったんです。でも、戦争が酷くなってから、今度は **Selective Service** 受けたんですね。

TT: そのうちに、奥さんと結婚したんでしょう？

ST: はい？

TT: 戦争が始まってから？

ST: 前です。

TT: 戦前ですか？戦後？

ST: No, no, 戦争が—

TT: 結婚したのは—

ST: 結婚したのはね、ここに—

YT: 1942 ね。

ST: 1943 にね—

JT: 42

YT: 42 だよ

ST: **She knows a Miwa** [みわ家] のファミリー知っとるっという。で、私タカハシファミリーも知っておったので、ここに書いてありますね、結婚したほうが、気持ちがちやんと落ち着くから。たとえインターンされても、自分はもうファミリーがおるということになる、強く生きんといかんという気持ちになるでしょう。ひとりだったら勝手になんでもいいんだもん。結婚したほうがいいから言って私は結婚したって書いてありますね。(笑い)

JT: インターンをされるのが、可能性があることをもう考えてたんですか。

ST: そうですね。私はもう、そういう可能性もね。いつインターンされるかわからんけれども、**she understand** [原文ママ understood わかった] って、私のね、もう帰米二世だから、いつインターンされるかわからん。でも、**she** [彼女] は OK してから結婚したわけですね。

TT: その時には、日本語学校、先生はひっぱられたんですか？

ST: 校長先生はね、もう一人

TT: もう最初から行ったんでしょ？

ST: **Sand Island** 「サンドアイランド収容所」、そしてからアメリカの大陸に送られました。便があるごとにね、アメリカに送られて。だから、あとの先生たちはね、

TT: 次から次に一 引っ張られたんでしょ？

ST: (笑い) **But**, インターンされない人もありましたね。でも、自分から今度、**volunteer** [志願] した人もおりますし、後は、**Waiialae** ジャパニーズスクールにもね、ハラノっていう先生は、**volunteer** [ボランティア] して **interpreter** [通訳] になりました。後は、ヨシナガ先生などは、ここでコントラクターの仕事をしてましたからね。だから、ここに書いてありますが、他の若い先生が、タイラって言う先生、私と一緒にインターンされたって書いてありますが、みんなじゃないんですね。

TT: そして、1943 の 3 月に、**Selective Service** のオフィスに行って、いろいろ質問されたんでしょ？

ST: **Yea, yea.** そうそう **Selective Service**—いろいろ調べられて、ここにありますが、1943 の **March** [3 月] に私は脅威検査を。アメリカ市民としての権利の元に、当地に上陸した以上は、もし徴兵されれば、命に掛けても立派に義務を果たす覚悟はしていたが、志願してまで入隊する気持ちは無かった。もし徴兵されたら、**induct** されたら。。。でも、自分から進んで **volunteer** する気持ちは無かったと書いてあるんでね。で、それがどういう理由かっていうと、言葉が私はね、**page 7** [7 ページ] にありますか、私、言葉が不自由だったということ。言葉が、**English** [英語] が十分で無かったって言うこと。ですから、戦争に行つて、銃を持って、自分から日本人とこう戦争するって、志願してするつもりで一、そうい

う気持ちにはなれなかったと書いてありますね。 **Induct** されたらやる、ってね。難しいね。

TT: そして、そのインタビューの直ぐ後に、 **FBI** が来てー

ST: **They come** [来ました] ね。ほんと二日間ぐらい後ですね、もう。脅威検査のやられた **2 days**[二日]ぐらい **later** [後] かね。 **Working place** [仕事場] に来たのね、ホノウリウリのね。そして、ここに書いてあるように、すぐつれてったんじゃないんですよ、キャンプにね。 **They** [彼ら] ((?)) 扱いして。お前は、だから家にいっぺん帰って、自分のいる物持って、そしてその日の **afternoon** [午後] ね、 **1 o'clock** [一時] か、イミグレーションステーションに行きなさいってね。非常にあの、始めのミヤギ先生はもうそのまま連れてってね。私の場合は、それだけ丁寧な扱ってくれたわけよね。

JT: それは帰米二世たちの一般の取り扱いでしたか？

ST: はいはい、帰米の人たちはね、インターメントキャンプの中にも、この中にも書いてます。帰米の中にもですね、非常に、例えばメインランドにもそういう強い気持ちを持っている人は別にああいうキャンプがあったように、自分はもう日本に帰るとい気持ちの人もおったわけね。こんな差別されるよりも日本に帰ったほうがいいって。私の場合は自分はハワイに家族がある、どうしてもハワイが一番。日本にはかえらないっていう。日本に帰りたいて言う人は、今度メインランドに送られたわけです。で、自分はハワイにまたおりたいって思う人がリリースされた。で、インターメントクローズだったね。クローズする前に、帰米でもメインランドに送られて、 **Tule Lake** [ツールレイク強制収容所] ってありましたね。 **Tule Lake** なんかに送られて。で、これにも書いてありますが、しかし **Tule Lake** に送られた人たちが日本に送られたのは少しです、 **not too much** [あまり多くない]。やっぱり戦争が山を越してましたから、だから。たいていはね、帰米二世でも、リリースされたんです。本当に、日本に帰りたいていうような人たちは、アメリカに送られたんですね。一世というの、日本人の一世はもう外国人ですから、 **foreigner** [外国人] ですから、問題なくね、メインランドに送られました。帰米「二世」ですから、アメリカ **citizen** [市民] だから。理由が無い、 **reason** [理由] が無いのに、インターンしてるけど、できないわけ。アメリカの **Constitution** [憲法] ではね。だから後で **apologize** [謝罪] したわけです。だから私たちは、ハワイにいて、リリースされた。私のフレンドはアメリカに行きましたが、アメリカでは **Tule Lake** に送られましたが、でも、日本には帰らなかったですね。そういう人もおりますね。

TT: そこで、収容所にいれられたんですね。

ST: はい、ここに。ホノルル[ホノウリウリの意]インターメントキャンプ。ここに入れられたんですよ、はい。ここはね、こう来てここ、山の中に入って、道のこちら側にメスホールって食べる所。ただ屋根、 **wall** [壁] が無いんですよ。屋根があって、ただテーブルがあって食べるわけですよ。で、キッチンがついててね。で、そこから、この橋が、谷ですから、橋を渡って、こちらにバラックスがあっ

て、ここにずーっところうハウスがあつてね。で、そのハウスの中に、**bunk bed** [二段ベッド]っていう[ベッド]がフォー、だから八人が入るわけ、ワンルームにね。その中に。それが、一周隊、二周隊、三周隊、四一。**Four group**[4グループ]に、ワングループがシックスハウスぐらいですね。私が **number 4**[4周隊]に入りました。で、そこのグループのマスターが、ここに書いたように、ジェームス・ムラカミっていう人。**City and County**[ホノルル総合市郡]の **auditor**[監査役]をした人。なぜあの人が入インターンされたか私にはわからんと書いてありますがね。あの人 **spokesman**[スポークスマン]でしたね。**Number 4**のね。そして、全体の、この全部の一番上のジャパニーズインターメントトップは、サカモト…サカモトなんて言ったかね。あの人 **spokesman** でしたね。で、あのここにも書いてありますが、ホノウリウリインターメントキャンプはね、ストイックじゃなかったんですもんね。仕事を、あの無理に仕事をせいで無いんですね。もし自分が仕事したかったら、**if you like work** [仕事をしたかったら]、あの、しなさいって。したくなかったらせんでもいい。で、どんな仕事、私がした、キッチンの仕事とかね、野菜を作るとか。カーペンターとか。仕事したら、**1 hour** [一時間]に **10**セントペイする。クーポンですよ。それをくれるわけですね。で、私は、カーペン…あの…キッチンのヘルパー、ここに書いてありますが、あの、スプーンあるでしょう？食べるね、スプーンとフォークね。インターニーが、朝と昼と晩食べるころ、この橋をわたって、こっちこの食堂に来たときにこう並べますね。自分が先に来てから、このキッチンでね、スプーンと、**100**人おったら **100**スプーン、フォーク。**100**、カウントして。それ、来た人に一つずつ渡すわけ。非常にストイックだったね。そして、済んだら、食べて済んだらね、今度またカウントするわけ。で、ワンでもミス、ハンドレット渡して、ナインティーナインしかないときには、**gotta look all over** [隅から隅まで探す]、みんなで探さんといかんね。でも、私がその仕事してからは、ああいうことは無かったんですが、このサンドアイランドの時にはね、誰かそのスプーン取ってって、あれをシャープしてね、ナイフのように作って。で、あの、自分であのどこかに刺して、自殺しようと、そういう人が居ったから、厳しくなったと聞いてますがね。でも、私たちが仕事してからはそういうことは無かったんですね。私はクーポンをね、もらう、一時間には **10**セントのクーポンくれたんですね。タダじゃなくね。いやあ実はジェントルマンだった。でもガードがついてるわけですね。銃を持ったガードがついてね。ウィンドウも何も無いんです。で、後であのファミリーにね会うチャンスがあつたんです。ワンマンズ、ワンタイムで。で、うちの家内がホノルルからバスに乗って会いに来て。でも、ベイビーが生まれるようになってから来られませんが、ベイビーが今度生まれた時も、ここに書いてありますが、ホスピタルにも行かれなかった。私がここにおつたからね。スリーマンズ経って、ベイビーが少し大きくなって、ワイフがベイビーを連れて、この山の中にね、ここに来て、初めてあつたのは **1944** とか書いてありますがね。本当に考えてみると、夢のようですね。

TT: ((?))で、見るの・・・のビジティングは一ヶ月一回でした？

ST: 私、はっきりしない。一回か、**You know? Two time? You not remember?** [覚えているか? 二回?] **Anyway one time**[いづれにしても一回] か、**two time**[2回]だね。**Every week**[毎週]じゃない。**Yea yea yea**, あれだけラッキーだったね、このホノウリウリ。こっちはないんです。ここは **internment camp** だった。**Only family**[家族のみ]ですね、**Close family** [親兄弟]。**Friend** はだめだった。**Family** でないとね。

TT: 食べ物なんか持ってきたんですか?

ST: 食べ物。あの、食べ物。**Cannot bring anything.** [何も持ち込めなかった]

TT: できなかったのね。

ST: **Yea**, 何にも、あれ。バス。いやただ会うだけ。メスホールはみんなが一緒に乗るときにチェックしますね。何も持ってこられないね。会う、ファミリーと会うだけだね。写真も撮られなかったと思うね。

TT: そうしたら、ホノウリウリキャンプで、一年以上入ってたんですか?

ST: はいそうです。

TT: 一年…

ST: 一年間 丁度一年くらいですね。そして、その後、戦争がね、そのころね、1944。あの、**War** [戦争] がねずーっとあの沖縄の方になってた、ね。ハワイは心配なくなっただけです。**No worry about Hawaii** ね。だから今度リリースされた。**Rehearing**[再審理]つてもう一つヒアリングやって、そして、**OK** の人はリリースされたわけだね。後は **some**[若干名] はメインランドに送られましたね。もう 19…あれは戦争が…44 だと思いますね、戦争済む前の年に、リリースされて。で、もう書いてありますがね、リリースって言うてるのは、本当のリリースじゃないんですね。あの、イオラニパレスにね、ガバメント…あの…ミリタリーガバメントのオフィスがありました。そこにレポートせんといかん。私が。ワンマンズワンタイム。自分は何をしてるかってね。どんなことをしてるか。だから、テナポラリーにリリース。本当のリリースじゃなかった。それで、それが一年続いたんです。196…フルリリースになったのが、1945、戦争が済んだ年の直ぐちよっと前ですね。一年間はね、仮釈放いって、テナポラリーリリースだったんですね、やっぱり。あれだけ、リリースはするけれども、**you had to report** [出頭する]。どこか行く言うたら、**had to permit** [許可をもらおう]。

TT: まだ戦争が、まだ終わってないから、

ST: 終わってなかった。戦争が、済む、もう少しね、41に済んだんですかね。戦争41にスタートして、45にね、済んだのは。本当に考えてみると、夢のようですね。

TT: その収容所の経験に対して、今ではどんな気持ちになりますか?

ST: そうですね。収容所ですね、私は、これは、いいチャンスだから、自分で一つはスタディをしようとか。イングリッシュのね、クラスがあったんです。あの、ここにも書いてありますが、**one young man**[若い男性]でね、名前ここに書いてあ

りますがね、ハワイ島から来た人がね、アメリカの大学をでてますから、英語が。この人がね、イングリッシュクラスを始めたんですよ。インタニーですよ。私たちが何人か、10人くらい集まって、その人のところでイングリッシュを勉強しました。それから、これ **good chance** [いい機会] だと思ってね。そして、ここにも書いてありますが、あの、バイオリンの先生がおってね、モイリイリの日本語学校のスズキって先生が、バイオリンが上手だったんで、で、私もバイオリンもったから、バイオリンのクラブを。

TT: ああそう。

ST: で、このメスホールでね、バイオリンの教室。あそこのガードがね、来て、私たちに、**I wanna learn violin** [バイオリンを習いたい] って。銃をあの、ライフルをサイドに置いてから、カウボーイソングを(笑い)。私は上手だ上手だって(手をたたき)手をたたいて。なんべんかちらしに書いてありますが。それから、そういう風にね、それから、サンディ…あの、**church**[教会] がね、**Rev. Dozier** [ドジョエー神父] っていう人ですが、日本語と英語のできる牧師さんがおましてね、私が結婚するときに、この人の世話になった。ワイアラエ日本語学校の **Mrs. Miyagi** [ミヤギ婦人] がね、知って居ってね。その **Dozier** って言う先生が、日本の九州のあそこには有名な大学がありますがね、その大学[西南学院大学]を始めた人。その子供です。**Edwin Dozier** [エドウィンドジョエー] っていうね。その人が、あの、アメリカに帰る途中ハワイによって、ずっとアメリカよりハワイにずっとおって、日本人が多いから日本人のために、いろいろ説教したり。あの人がね、一週間にいっぺん、ホノルルから来て、このメスホールでサンデーサービスしてくれたんです。私はこれ **good chance** だからって言って、ね、そこに行って、その人は非常に **nice man**[良い方] で、世界の平和を、**peace** [平和] をいつでも祈ってくれたんで、私は集まる人は少なかったけれども、サンデーサービスにずっと行きました。だから、キャンプの生活っていうのは、私にとっては、仕事もしたし、それからバイオリンやったり英語も勉強したり、サンデーはチャーチ、そのサンデーサービスですね、でクリスチャンに。だから私、今でもこれに書いてありますがね、チャーチに行ってますが、その、それをそこで受けたわけですね、いろいろと話をね。ホノルルからわざわざ車で来て、話してくれたんでね。だから忘れられないね。一週間のうちにそういうあれが、一年続いたんでね。仕事もした。自分で英語の勉強もした。バイオリンも習って、それから精神的な、サンデーはサービスを受けた。

TT: それはキャンプに入っている間は、憎んだ、憎らしいって言うような気持ちはしなかったんですか？

ST: 何？

TT: あの、自分はこんな所に入れられて、罪もなし、何も悪いこと

ST: あー。何も悪いことしてないね。いや、なぜこんなことされたかっていうね。

TT: ええ、牢屋のような所に入れられたって。

ST: 私はね、あまりそういう気持ち無かったですね。

TT: 他の人はそういう気持ちがあったよう。

ST: **Yea** 中にはそういう人もおったんで。なぜ、だから、そういう人はアメリカに行ってしまった。私は、アンダースタンド。私は、帰米二世だけれども、英語もわからないしね、そうして、やっぱり日本で25年も居って、日本の教育を受けるんですから、仕方ないと思ったんです。**They cannot help** [仕方がない]ね。で、**five year** [五年] ね…これに書いてますが、ノーマルスクールでファイブイヤーね、軍事教練って言ってから、陸軍のオフィサーがね、アーミーオフィサーがねおって、各クラスに、**1 week, one, two times** [週に一、2回] ね、訓練、あの銃の持ち方や、いろいろ訓練。それを受けてるわけですね。それから、私は当然、インターンされても仕方がないと、私 **understand** [理解できる]。

TT: わかりました。

JT: FBIはそんな詳しいことをみんな知ってたわけですか。

ST: それはねえ。**Maybe** [もしかしたら] あの…**they understand** [彼らはわかっていた] ね。だから、**apologize** して、**I'm sorry** って大統領がね、サインして、私とインターンされた人に20,000ドルのチェックを送ってくれましたね。だからあそこを書いてありますが、60年も経ってから、1990。アメリカという国はありがたいと思ってね。60年も前のことを、自分たちがやったことを。何の罪もない、何の、私も書いてますが、自分は一生懸命働いて、**tax** [税金]は収めて、**police** [警察]のレコードも何にも無い。なぜ、自分はインターンされたかってね。そういう疑問があったけれども、しかし、大きな所から考えて、アメリカの政府って考えて、やっぱりハワイは非常に危なかった。いつ日本がここに来るかわからんという、そういうシチュエーションでは、私たちのような日本語がわかって、日本のライフルの使い方も、トレーニングも受けているものは、ここにおれば、もし来た場合には一番先に、お前たちは利用されて、んで、お前たちを **protect** [守る] したんだと、そう向こうが言えばね、ありがたいと思わないといけな。そうやって書いてありますよ。**I understand** [理解できる] ね。だから、非常にいい経験になったと思いますね。うちの家内は、子供と一緒に、うちの兄がね、ここでファーマーしてました。とても良くしてくれましたから、うちの心配は無かったですからね。いやあ、自分の子供やワイフは心配だったら、子供残して。兄がよくしてくれたからね。兄も私と同じように帰米です。でも、若いときにハワイに来て、親を助けてこのファーマーをやったからね。だから良く知ってますよね。

JT: タカハシさんは日本育てで、教育もいただいて、そういう人だから、米国のFBIに疑われたのは仕方が無いって

ST: 仕方がないと私も。そうそう。**I understand that way.** 私、あんたが言う仕方が無い、これは戦争だから。日本とアメリカ戦争だからね。これは **cannot help** [仕方がない]。そう思ったんです。上から見たらね、やっぱりそう。なぜ、インターンされたかって言うと、そうあれが、まあ自分のやっぱり育ったころ考えると

仕方がないです、これは。あきらめて。それよりも、自分はインターンされとる間、自分で、何かね、自分の心のために何かプラスになるようなことした。もうなんていいですかね、もうなぜインターンされたか。そればかり考えてもういやになるって人もあるわけだね。私はそういう風に考えなかったから。それだけ。

TT: だから、先生はホノウリウリにいたときには、そういう考えで心が治まったわけですね。

ST: そう。非常に、心が治まって、別に、自棄になって反対して、何かするっていうことはなにもなかったって。私はね、できるだけタイムを自分のプラスになるように。あんたが言うようにね、仕方が無い。これは戦争だからね。だから、考えたらそうでしょうか？二十何年も生まれてから日本に育って、日本の all 教育を受けて、日本で先生をして、日本で軍事教練も受けて、そういうもんだから、戦争でなくてね、あの向こうが疑うって言うより、私を **protect** してくれたという風に考えたら、ね。そういう。

JT: ツキヤマさんたちのように、通訳兵になって、親の国をつぶす為に訳して、先生も…

ST: 私も通訳兵に…

JT: 通訳兵になったら、とても役に立ったわけ。

ST: 通訳兵に。ああそうですか。やっぱり同じ考えでしょう。

TT: タカバヤシさんと一緒に

ST: はい？

TT: タカバヤシと一緒に。

ST: ああそうですか。

JT: でもいくらかは、日本は親の国だから、それ、その点は苦しい所があったですね。

ST: そう。つらい所もあった。それ、わかりますよね。自分。だから私はね、日本はもし戦争に負けて、北海道はロシアが取る…九州のはシナが、チャイナが取るね。本州はアメリカが。もうばらばらに切られて、日本はもう最低の所まで落ちる。それ本当に悲しいことね。だからなるべくそれにならないように、祈って。アメリカだけが主にね、やってよかったという風に考えられるね。だから、北海道も、うちの兄が居りまして。ラッキーだったと思うね。日本がこんな風になるの。朝鮮みたいだね、朝鮮はコリアは南と北、今でもですよ。あれ、日本があんなだったらどうなりますかね。ある程度ラッキーだったと思うね。いやあ、本当に戦争というものは悲しいものだけでも、いろいろとためにもなりましたね。

JT: 僕のお父さんは、調べられたけれど、インターンされました。その時は、うちのお父さんは、質問に答えたとき、アメリカと日本が戦争するのは嫌いだから、ただやめた、

ST: へへへ、やめた方がいい

JT: ええ、ええ、両方がやめて、

ST: 仲良くね

JT: ええ、仲良くして、そして

ST: あれが本当の気持ち、あれが本当の気持ちだったですね。早くやめて。私もね、早くやめて。だからサンデーにね、チャーチに行って早く戦争をやめて、平和になるようにね、祈ったわけですね。

TT: ではあの、戦争が終ってからの話ですけれども、先生は何をしたんですか？

ST: 戦争が終ったときに私もあの、帰ってしまいましたから、前の仕事を、戦争の、あの一[戦争]中に、仕事してた、あの、インターンされる前におった、**Honolulu Planing Mill**に戻ったんです。あの、**internment camp** から帰ってね。そこに戻って、インターメントキャンプで私はあそこの、**lumber yard** の仕事をしまして、そして、今度カーペンターに自分で、自分の仕事をどうしても。言葉は使わなくても…手でやるんだから、カーペンターならできるから。で、うちの家内のブラザーインロー、ポール・モリハラのコントラクターにカーペンターヘルパー、カーペンターになったっていうね。それでその時にこのハウスを作った。そしてカーペンターやったんだけど、慣れない仕事だったんで、怪我をしたんだよ。足をね、怪我をして、カーペンターできなくなった。そして、その時丁度ラッキーに、日本語学校がまた始まったんです。そして戦争中に二世たちがよく、アメリカのために尽くしたから、それを認めてね。で、彼らはほとんど日本語学校へ行ったわけよね。だから日本語学校をまた始めて。で、パラマ学園がそのころ千七百人くらい生徒おったんです。戦後ですよ。で、オオハマ先生がわざわざうちにも来てね、パラマ学園へ来てくれて。私は、パラマ学園に行って、あそこの先生。そして四年間パラマ学園でして、丁度ミホ…カツロウ・ミホさんのお父さん、ミホ先生が、カймキのあそこの消防署の向かいにあるチャーチがありますね。あそこのスクール、イングリッシュスクールがありましたね。そこ借りて、バラして、カймキ…新カймキ日本語学校というのをはじめた。ミホ先生が始めた。で、ミホ先生があれ、広島ですから。パラマ学園のオオハマ先生も広島だからね。来て、オオハマ先生の。私はカймキだから、私は校長としてねカймキに迎えたいと。で、私はミホ先生が、招待してカймキの日本語学校に、校長として今度入ったわけですね。で、あそこに22年私は教えました。

TT: ああそう。

ST: その頃タカギさんも世話して…(笑い)

TT: そのころのカймキ公園のすぐ側でしょ？

ST: はい？

TT: カймキ公園の隣でしょう？

ST: カймキのね…

TT: 10番でしょ？

ST: **No, no, no**…

YT: ファイヤーステーションの **across** [向かい側]

TT: ああココヘッドアベニューの

ST: ファイヤーステーションがあるでしょ。あの構内にチャーチがありますね。

TT: はい、そう。

ST: あのチャーチが、イングリッシュスクールやっておったんです。ウィークデーに。だからクラスルームがあった。で、それを借りてね。

TT: 午後中は日本語学校に…

ST: ミホ先生は **13th** [13番街] アベニューに住んでおったんです、あの頃。十三番にね。だからミホ先生近いでしょう。で、あそこを借りて、そして日本語学校を始めて、で、私になってからはもう生徒がいっぱい増えたので、今度リリウオカラニスクール、近いでしょ、日本語学校をリリウオカラニスクールでもやったわけですね。

TT: で、その後、ラジオ放送に入ったわけでしょう。

ST: はい。ラジオもそうそう。

TT: 日本語学校の先生もしてると同時にラジオの放送も、担当になったんですね。

ST: あのね、日本語学校の先生というのはね、ハーフデーの仕事なんですよ。お昼からね、イングリッシュスクール済んでからだから。ハーフデーの仕事ですから、ペイもハーフデーの((?))に無いわけです。それで、日本語学校のサラリーだけでは、私のファミリーをサポートするできません。ね。いくらもらったか今でも覚えてますが。だから、三人の子供もおりましたし、やっぱり日本語学校を教えながらできる仕事、ラジオの仕事をね。丁度私あの、タイムス…今、キングストリーのタイムススーパーマーケット、あのこっち側にある、あそこのベレタニアストリーの、あのタツミ…タツミさんの、ミセスはピアノの先生でしたが、ピアノのスタジオがありましてね。そこがね、ラジオのカーフーという、**KAHU** っていう日本語の部のスタジオがあったんです。**KAHU** っていうのはね、あの本局はワイパフにあったんです。**KAHU Waipahu** っていう。で、その**KAHU** で、朝とね、夜の日本語の。昼は無いのね。朝と昼の[夜の意?]放送を…日本語の放送で作る。英語の放送でね、丁度私は昼は日本語[学校]ですから、朝と夜は[時間が]ありますから。で、その**KAHU** の仕事をしたんです。朝早くおきて行ってね、5時か6時ごろ行って、朝の。そして、お昼からまた日本語学校を教えて、帰って、今度はまた夜ね、その**KAHU** に行って。主に私がやったのは、あの…レコードをかけたりアナウンスしたりボードがあるんですね。アナウンサーをそっちへやってね。そのボードの仕事をやったんですね。で、タイムのすごいこういった…あのミュージックをかけたり、ね。その仕事をずっとやりましてね。今度、**nine year** [九年間] その仕事をして、丁度カイムキに、あの **Kaimuki**

**Bowling** [ボーリング場] のところに、コホというのができたんです。**KOHO** とコホとね。そのコホでね、どうしてもあの、ニュース放送のほうに要るから来てくれて言うんで、**KOHO** は家から近いしね。で、**KOHO** に変わったんです。これ 1960 頃ですかね。私は…書いてありますけども。**KOHO** の仕事は夜、朝は無いんですね。夜だけだったと思うんですがね。ともかく、ずーっと夜中まである…日本から **NHK** のニュースが入るわけ。あの頃今と違って **NHK** のニュースをあの、ラジオで入ってくるわけです。それを、ラジオにテープするわけですね。そのテープをプレイバックして、それを聞きながらニュースを書くわけですね。で、ニュースキャスターに渡すわけですね。そういう仕事をしたんですね。ニュースの仕事に。やっぱり日本語と英語がわからないとできない仕事ですよ。だから、日本語のニュースですから、日本語がわからないとできない仕事で、私には丁度いい仕事だったので。ところが、ラジオの仕事というのはサタデーもサンデーもないんです。サタデーサンデーが忙しい、かえってね。だから朝早くから、夜この遅くまでって言うのは…**KOHO** は夜だけって…夜はずーっと、仕事して。夜中までの仕事ね。朝少し休んで、今度は日本語学校でしょ？そしてまた夜…。その **KOHO** と、ラジオの仕事と、これはニュースの仕事です。**KOHO** が、あれがクローズになって、あそこのビルディングがね、今度はワイキキに変わったんです。1992 かね。変わったときにまた、ワイキキに行きましたがね。で、あれ、あのあそこで 1,2 年で **KOHO** はクローズになってしまった。それで私はラジオの仕事はなくなりました。

TT: 何年でしたか？

ST: それを書いてある…1992 かと思うんですね。丁度ね。この…みんなに 40 何年かって。**KAHU** が 9 year、こっちが 30 何年かね。やったわけです。みんなで 40 何年かラジオの仕事したわけですね。だから、それで私は仕事は、その仕事は済みましたがね。ラジオの仕事と、あの、日本語学校はもうカイムキに変わってからね、しばらく経ってだんだん生徒が少なくなってきました、私が引退して、アダチ先生という先生がおりましたから、あの **Mr.** アダチがミホ先生とクローズだったから、アダチ先生が **Mrs.** アダチが私の後をついで…頼んでね、私はカイムキは生徒が減ったから、体制的に非常にハードになったからね、私は引退した。でも、**KOHO** のラジオは続けたわけです、それからまだずっとね。で、ラジオの仕事は続けても、まあサタデーもサンデーも仕事をしましたがね。で、そこに書いてあります。なかなか、サンデーも仕事だとチャーチに行くタイムもなかなか無かった。全部ラジオの仕事も済んでから、今度、ここに書いてあります、このサンデーはね、チャーチに行くようになって、始めは又又チャーチに行っていました。タカヤ先生って人がいましたね。ところが、こういう風に足が悪いからね、ドライブするのが遠いですから、このレシティーチャーチ、このすぐこの近くにありますがね。そこのタイムマーケットの道の向こう側にね。レシティーチャーチって言うのが

TT: **Wesley Church** [ウェスリー教会]?

ST: レシティーチャーチ。あそこの…

TT: **Methodist** [メソジスト] の教会ね。

ST: ああ、メソジスト。**Yea**, あの教会ですね。だから、あそこの教会に私は変わってね、こちらの牧師さんも **OK** て。今はここに行っています。エブリーサンデーね。

TT: それで、仕事からほとんど引退したのは、もう 10 年前ですね。

ST: そうそう。19...ここに書いてますね...1992...**Japan** に行ったわけですね。日本に行って。1992...それで...。日米戦争中に私たちは **married** [結婚]、結婚して私たちは今年で丁度 50 年。これ 50 年...1942 ですから、1992 ですね。50 年なるんで、金婚式を。

YT: **In 1992, we had big grand anniversary...**[1992 年に盛大な金婚式を行いました。]

ST: 金婚式をして。で、私はこの愛という字を[壁を指差しながら]、私が書いたんです、これを。**My wife** [妻]が鶴ね、ゴールドのペーパーであの、クレーン、鶴を折って **one thousand, one thousand one** [千羽か千一羽] かね、あれを貼ったんです[壁を指差しながら]。鶴は千年って言って。そして、鶴を金紙でこれに貼り付けて。[額縁に金色の折鶴で愛という字] 式場にこれを飾ってもらって、私が帰米二世として、二つの祖国に、アメリカと日本の二つの祖国に自分で生きてきた私であっては、現在の幸せはこの言葉に尽きると。この愛という言葉に尽きると。私は愛があったから、生きてこられた。と、ここに書いてありますね。多くの困難に直面しながらも、これを切り抜ける力を与えてくれたのは、ただ、人間の愛ばかり無くて、他ない国の愛、さらには神、仏の愛に拠るところも大きかったと思う、と[自著の自伝を読み返しながら]。国の、色々の私、ライフのうちにいろいろなのがあったけれども、この愛っていうのはあの、人間、人間だけの愛でなく、でも、神様や仏様の愛もあったから、切り抜けてくることができたというね。ね、で、その年に私は、それを記念に、日本に。アメリカ政府から 20,000 もらったでしょ？そのお金をできるだけ有効に使う為に、**donate** [寄付] したり、それからそのお金で日本に行って、自分をそうやって育ててくれたおばあさんのお墓参りをしたわけですね。で、うちの家内の、マイワイフのほうにも行きました。あれは山口県ですね。これが、[自著伝の] **Part 1** [第一部] なんです。そんで今度は **Part 2** [第二部] はその後どうしたかっていうことが書いてあります。本当に、夢のようですね。

TT: 先生はね、帰米二世として、帰米二世はハワイに対して、どんな影響を与えたと思いますか？

ST: そうですね。帰米二世は、日本語も英語も、どちらかというとなら英語もわかる人も多いんですから。日本語もね。だから、ハワイのために尽くしたと思いますけれども、いやその、**other hand** [その一方で] は戦争中ね、自分がハワイで生まれた、ハワイと、自分が育った、教育を受けた日本と、その間に入って、日本とアメリカの間に入って、非常に心の苦しみを戦争でね受けたと。私はそれは帰米二世のふりやっただと思いますね。戦争中の苦しみを受けたって言うのも。しかしハワイ

のためには、例えば通訳兵になったりね、で、日本語も英語もわかりますから、いろいろな仕事のためにハワイの政府のためにも、日本語英語がわかる仕事のために努力したと思いますね。ハワイのためにもなったと思いますね。苦労したけれども、それだけまた、日本で受けた教育っていうものは決して悪くなかったと、私、思いますね。お父さんお母さん、親を大事にするなんてことはね、日本で一番、学校の一番中心は、親を大事にする。友達に仲良くするとかね、嘘をつかないとか。ああいうのね。修身だよ。修身というもの、**Yea...**

TT: では、最後ですけど、あの、将来の方に、**future generation** [後世]に対して、何かあの、メッセージをお伝えしたいですか？

ST: ああ、いや、そうですか(笑い)。そうですねえ…ハワイには、日系人も多いんですけれども、ほとんどもう…日系人って言うてもね、本当にミックスになってますし。特にこれ、というあれは無いが、やはり、日本人としていいところは、どこまでも私は残してもらいたいとね。例えば、さっき言いましたように、自分の親を、お父さんやお母さんをね、大事にするとか。嘘を、正直とかね。そういういい所はどこでも、どこまでも受け続けてもらいたいと私は思いますね。いいところはどこまでも、悪い所は捨てて、いい所はつけて。やっぱりアメリカ、ハワイにいる以上は、アメリカ人として、立派にアメリカ市民として、その、尽くしてもらいたいとおもう。それが、日本に自分が教育で見た、日本に対してもそれが恩返しになると思いますね。だからハワイで何か悪いことしたら、日本の恥にもなります。だから、ハワイで日本で受けた日系二世の、帰米二世がこういうことしてたっていうと、日本にとってもそれは非常に誇りに思うっていう、そういう風に私は考えていますね。

TT: はい。ごくろうさんでした。立派なお話でした。

ST: いやー、至らないです

JT: ご苦労様、先生。

ST: 口が[手で口をつぼめながら]…耳も聞こえないしね。えへへへ。

ST: スクールあれ、スクールモットーといいますね。

JT: **Yea, school motto** [校訓]。

ST: あれ、校訓。

JT: はい。生徒たちにね、何を言いましたか？

ST: 校訓というのはみんな、スクールのモットーですね。だから、「感謝しましょう」というのが一番。お父さんやお母さんにね。ありがとうとか、神様にも仏様にもありがとう。なんでも、友達に対してもいろいろしてありがとう。ありがとうっていうのは感謝しますって言うことですね。それから学校の生徒ですから、「一生懸命勉強しましょう」と。日本語学校なんで一時間ですかね。できるだけ、そのなんていうかね、一生懸命勉強しましょう。そしてもう一つは「みんなが仲良くしましょう」、ね。特にハワイは色々の人種が混ざってますから、みんなが

手をつないで仲良くしましょう、と。これが学校でも、年の上のでも若いのも、あるいは男も女もみんなが仲良く勉強しましょう、って。これがモットーだったんですね。これ学校の校訓って言います。学校の校ね、で訓っていうのは教えること。学校の一つの一番大事な教えって言う意味。「感謝しましょう」っていうのが一番ですよ。ありがたいと感謝。人間は感謝が一番大事だよ。

TT: 大変美しいことですね。

ST: そうですね。

TT: それこそ、ありがとうございます。

YT: こちらこそ、ありがとうございます。

ST: あれに入れとけばよかったね、書いてないよ。何かに書いてあったな、感謝しましょうって。

YT: 大変でしたね、本当に。ありがとうございます。

JT: それでは終わります。

Transcribed by Japanese Cultural Center of Hawai'i volunteers Shun Yamaya and Kiki Miyazaki, with some editing by Florence Sugimoto; completed October 2016.